

5-4. 市民防災と地域防災について

東日本大震災から10年になり、あの緊張感はやや薄れてきている感じがしますが、関係する報道などを聞く度に、様々に思いがよみがえってきます。しかし、残念ながら自然災害に対する関心度は高くなく、毎年の避難訓練などもコロナ禍で中断してしまっています。また、全国的には豪雨災害や局部地震といったものは発生していますし、東日本大震災の余震的なものも時々発生しているものの、わがことのように感じていないというのが実情だと思います。いつ来るかわわからないものに対しての対応ということは大変に難しいことですが、自然災害は突然に起きるもので、起きれば相当の被害や犠牲が想定できるということを思うと、備えて、その程度を緩和するということは極めて重要なことです。その自然災害も、我々の社会システムが変化していること共に気象の変化も加わって、想定外のことも起きてきており、発生した時はその時に対応するというような状況では間に合わないし、普段できないことは急にできないことだけは確かです。

東日本大震災の時を思い出すと、被害を大きくした要因は様々ではありますが、いくつか大切なこと、知っておいて伝えておきたいことがあります。それは、自然災害についての知識、現象が起きたときの確かな判断力、行動への直観力が大切であるということです。このことは、ハード的な防災対策があつたにしても、それはワンクッション的なものであるという認識が大事だということです。避難がほぼ完全に行われることを、マスメディアなどは「〇〇の奇蹟」などといいますが、それは奇蹟ではなく、地域並びに住民の方々の確かな積み重ね、意識がそうさせたのだと思います。

しかし、このように地域が情報を共有して自然災害に対して行動を適切に起こすようになるということは大変に時間もかかるし、キーマンも必要であると思います。実際に、地域で防災の講習会や訓練を行うに当たっても、全員が賛同するとは限らないし、町内会の役員であっても、いまさらなんで必要なのか、これまで被害も大きくなかったといわれる方も少数ではなくなってきました。そして、面倒だということでもう防災はいいよという意見が出ますし、行政に任せておいてはどうかということで、防災に対する関心度は時間とともに薄れてきています。つまり、笛吹けど踊らないということです。しかし、この災害列島で生活するということは自然災害と共存していかなければならない環境にあることに加えて、防災は生活環境を維持することでもあり、次世代への付けを残さないためにも不可欠のような気がします。また、防災活動を通じて、情報を共有することは、コミュニティを醸成する手段でもあり、地域を超えて、いまわれわれが目標としている自然の再生能力を超えない生活環境を維持するということにも些少ながらつながることになると思います。そのために、防災という特段の名目のもとでなくても、あらゆる機会や段階で地域を知るということをベースにして災害リスクを確かめ合うことが大切だと思います。もちろん、備蓄、避難場所、方法、施設なども大事ではありますが、それらの基礎知識としての地域知は極めて重要で、これがあるから発生時に直感力が働いて、行動を起こせるようになると思います。いつ起きるかわからないことへの対応には知恵が求められるものであると思います。